

「きく」 「聞」「聴」「訊」

「本を読む力」や「話を聞く力」は、ふだんの言語生活で養われないと、週三時間の国語の学習では、特設して集中的に学習してもなかなか実の力にはなりません。現代は、マルチメディアの時代ですから、学習者の言語生活も、テレビを観る、インターネットで探る・調べる・抜き出す、携帯電話でコミュニケーションする、ゲームを楽しむなど、さまざまなメディアを用いての生活です。そういうなかでも、人間として情報を受け入れる基本的な方法は身につけ、力としてつけていかなければなりません。特に「聞く力」はすべての学習の基本の力で、生きる力そのものです。

「きく」には、「聞」「聴」「訊」の三つがあります。「聴力」は「聴解力」とも言い、スキルとして取り出し、訓練して身につけることができます。「聞力」は「聴力」と重なりあうところもあって、はっきり分けられませんが、生活全般にわたる「きく」力です。例えば、耳をすます、話し手の方を向く、目で見て、話す速さに合わせて（考えながら）、予測しながら、方向づけをしながら、メモをとりながら（きく）、先入観を持たずにきく、よく（共感しながら）きく、話し手が話しやすいように気を配る（否定的・抵抗的でなく、好意的・協力的に、表情に気をつけてきく）、と

いったことです。身体感覚的なものでもあり、心の持ち方でもあります。指導者は聴く学習の折に学習者に話しかけるようにして聞くことの習慣を養うようにします。

「訊」は「ただす」ことです。私はコミュニケーションにおける聞き手の態度、インタビュアーの話し手としての心の持ちよう・ありようにとらえています。

「聴解力」をつけるためのミニ・単元

「聴解力」は、特設して計画的に訓練して力をつけることができます。二・三例を示しましょう。

一 連続ミニ単元「聴力養成訓練講座」

一回の学習は五分。ねらいを明確に示し、「聞き取りメモ」用紙を配布して、そこに書き込ませます。評価は、自己評価、相互評価、教師のコメントなどを用い、学習者自身が自分の聴力マップをつくれるようにします。連続しても十回は超えないこと。「聞き取りメモ」で、教師は学習者の「聴解力」を把握することができま

どのような聴解力の訓練をするかという点、

その話の場面、状況——どの・なんの・だれとだれの・その関係・話題状況など——をつかむ。

話し手の話の内容——論点・見解・立場・解釈・材料の使い方など——をつかむ。

伝えたい事柄（知識・情報）を正確にとらえる。

二人または数人の話を聞いて、共通するところ、く

違つところ、主張の程度を聞き比べる。

学習材は、指導者の話、学習者の話、ラジオやテレビなどで採取したものなど、さまざまなものを用います。

二 学び合いを取り入れた、中程度の連続ミニ単元

学習の単位は二十分くらいで、話をきいたあと、学習者同士が話し合い・学び合いをします。次のようなねらいを持ったものがよいでしょう。学習者同士で話し合つて発想・解釈・視点の個人差を知ることが目的です。

話し手の発話意図をとらえる。

話の大意・要旨をまとめる（まとめる前に話し合う）。複数の情報について、目的や必要から、情報に軽重をつけ、順位をつける。

三 特に細密な指導を要する一単位時間程度の単元学習プリント・学習材を工夫。次のような学習をします。

話の大意・要旨をまとめる。

話の論点・見解・解釈・立場・材料の使い方をつかむ。目的・必要から、情報を選択する。

学習者のスピーチを学習材にする

どのようなねらいの「きく」学習の学習材にするか、学習者一人一人のスピーチの内容をよく吟味し、修正を図つたうえで用いるようにします。学習者が恥をかいしたり、学習意欲喪失につながったりすることのないように、指導者

は配慮するのです。スピーチの学習で、そのでき具合を評価する「聞き取りメモ（題材、話の組み立てはよかったか、声の大きさ、発声、話し方はよかったかなど）」は、話し手に対する評価であつて、きくことの評価ではない。スピーチをきき合う学習は、温かな人間関係を育てるために行い、そのための評価は考えるべきでしょう。スピーチやきく力が育つには、四十人以下の学級でなければならないでしょう。

「きく耳を持つ」人へ

自立したきき方に「訊」があります。スピーチや研究発表をした後の質疑応答で、ききとれなかったこと、言った事柄について持った疑問、あいまいな箇所、話し手の発話意図や目的・必要に関してなど、自分のきき方にかかわつて問いただしておきたいことにつなげるきき方です。研究発表などは、レジュメが配布されますから、それについての発言も入ります。インタビュアーにのぞんでの問いは、コミュニケーションを成立させるか否かにかかわつて慎重さを要します。問い一つでその人の人柄、人への話し方、インタビュアーにのぞむ準備の程度などが見えてしまつ、つまりきく耳を持った人かどうかの判断がされます。自立した「きく生活者」を目ざしたいものです。

（前大正大学教授）